

台湾先住民運動による
「伝統」の再評価と観光資源化
～台湾タイヤル族の衣服を事例に～

慶應義塾大学文学部
民族学考古学専攻 山口ゼミ4年
大山実春

研究目的

- 台湾において少数民族である先住民族が、その権利回復を目指してどのように民族運動を起こしてきたか
- 台湾先住民族のタイヤル族の衣服形態が、1984年に始まった先住民運動の前後で変化しているか否かを比較検討
- 衣服形態の変化がある場合、先住民運動はそれに関与しているのか否か

研究対象



國立臺灣史前文化博物館より(2017年8月31日閲覧)
<http://www.dmtip.gov.tw/event/fas/htm/03place/03place.htm>

国: 中華民國(台湾)

総人口: 23,539,816人(2016年12月末時点)

名称: タイヤル族

人口: 約85,000人(2016年時点)

分布: 台湾北部・中部

(中華民国内政部HPより 2017年1月17日閲覧
<http://www.moi.gov.tw/stat/chart.aspx>)

台湾先住民運動の流れ(台湾表記)

1895年4月17日	日本に台湾割譲	1983年以前 原住民運動開始前
1945年10月25日	中華民国へ編入	
1983年	高山青発刊	1984年以降 原住民運動開始後
1984～1994年	原住民権利促進会発足 正名運動	
1987～1993年	戒厳令解除 土地返還要求デモ	
1995年	姓名条例改訂	2000年以降 原住民の権利回復
2001年	原住民身分法 原住民労働権保障法	
2005年	原住民族基本法	

1984年 原住民権利促進会発足

→先住民運動の実質的な開始時点。

先住民を困う社会状況の変化のタームポイント(笠原,2004)

丸山勝氏(2006)によると、

- ・「文化の政治化」は東アジア世界で明白に観察ができる」

- ・陳水扁総統による「文化政策白皮書」マニフェスト

タイヤル族にとって衣服が持つ意味

- ・慣習法(gaga)による統制(山路,2009)

- 婚礼・祭儀・禁忌別の衣服

- 地位や職を示す

- ・ルカイ族の慣習(住田,1996)

- 神仏に向かう際白装束に身を包む

- 貴族と平民階級の区分

対象資料

	長衣	短衣	方衣	頭部装飾物	計
典蔵台湾	98	43	75	56	271
国立民族学博物館	27	20	19	31	92
烏來泰雅民族博物館	23	7	23	13	69
東京家政大学	0	1	1	1	3
天理大学	2	0	0	0	2
計	150	71	118	91	437

ネット上の資料(162名分)

長衣5着、短衣92着、半袖型23着、ケープ型20着、方衣12着、頭部162件

分析方法

①形態

- ・長衣
- ・短衣
- ・方衣

②文様

- ・幾何学模様
- ・横縞、縦縞
- ・無地
- ・装飾物付き

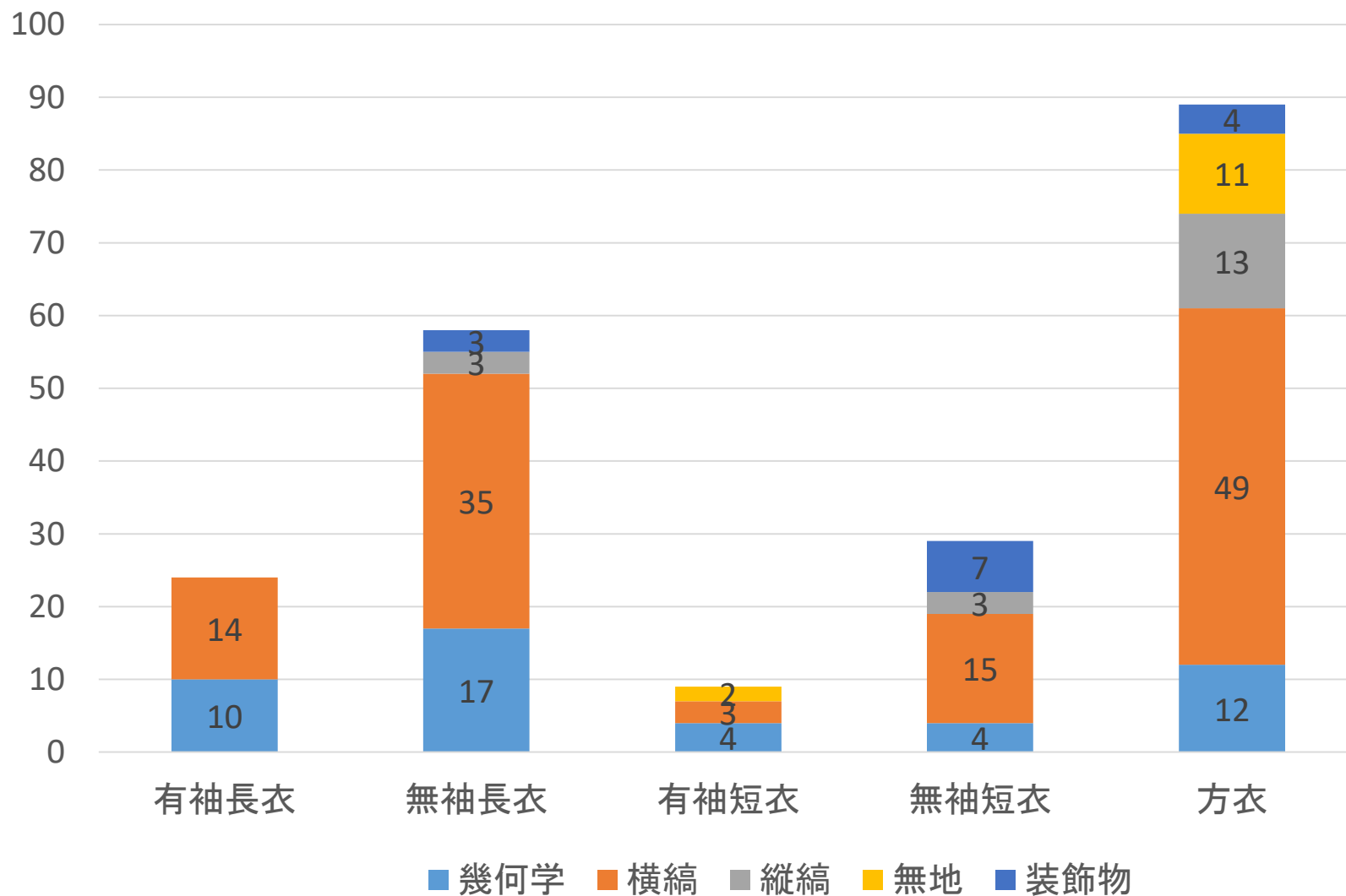
③頭部装飾物

分析方法

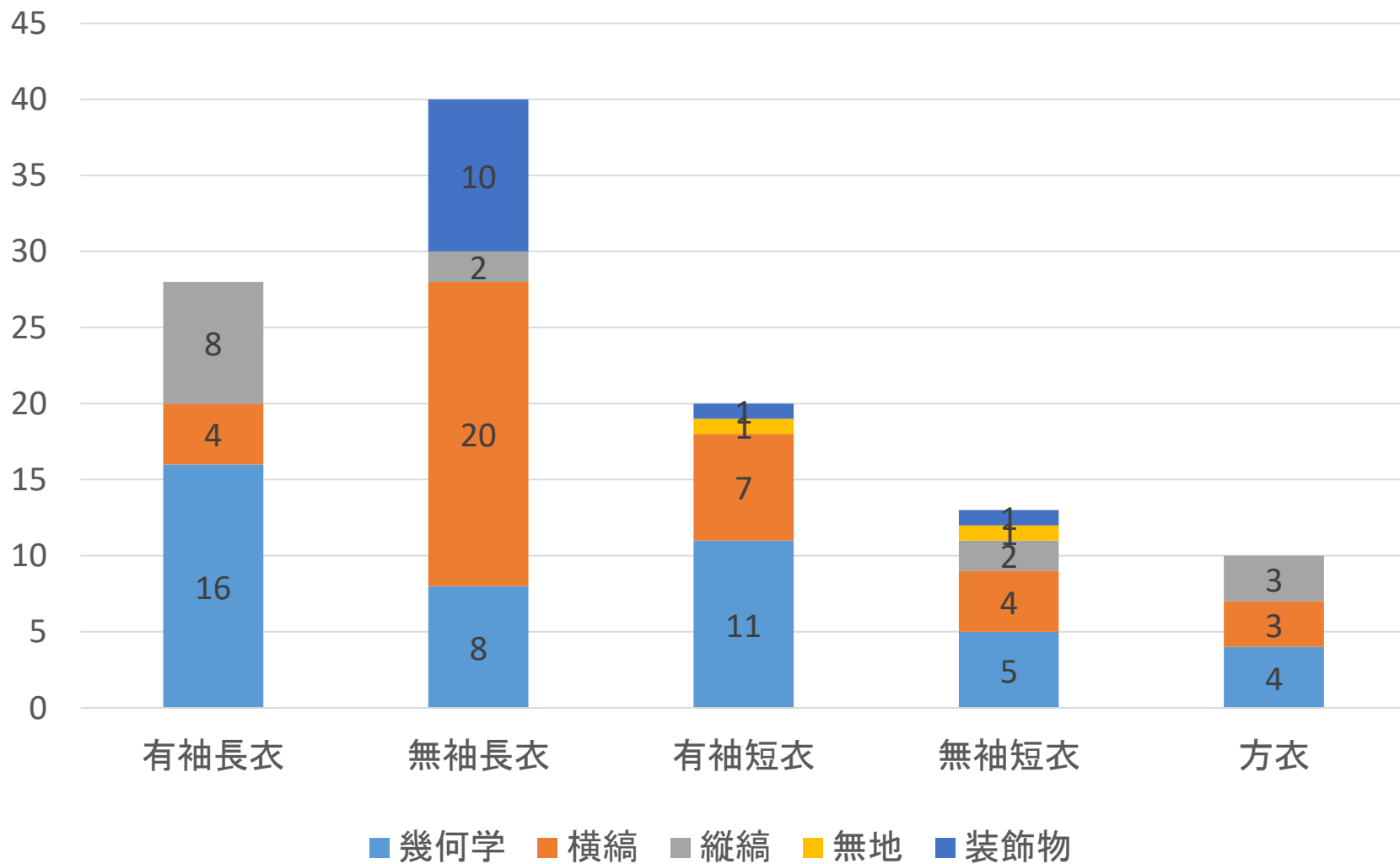




グラフ I : 1983年以前博物館所蔵衣服



グラフⅡ：1984年以降博物館所蔵衣服



2000年以降使用の衣服

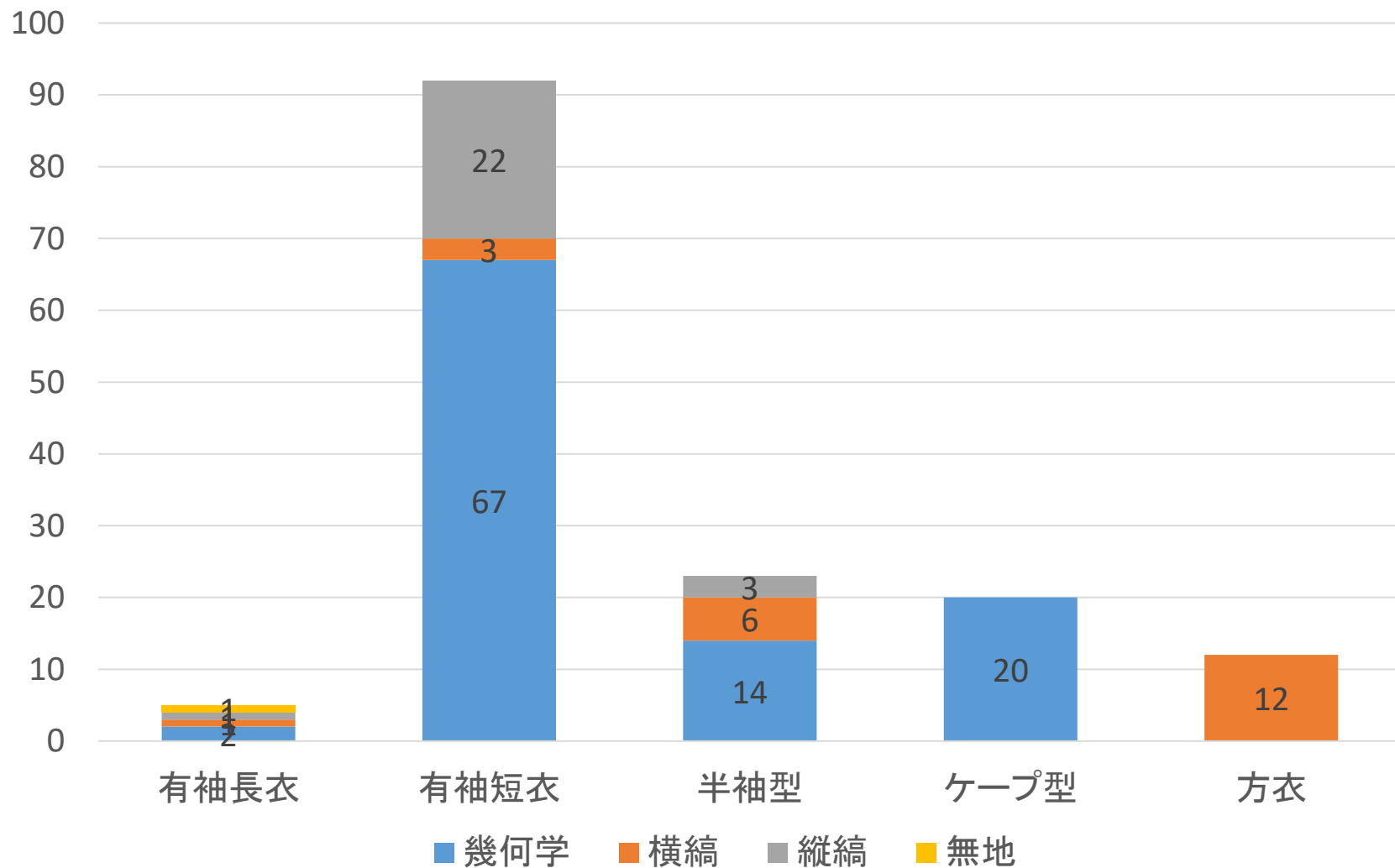


FCまとめ
(<https://summary.fc2.com/widget.php?widget>より)



4travel(<http://gensun.org/wid/39851>より)

グラフⅢ：2000年以降の観光地衣服

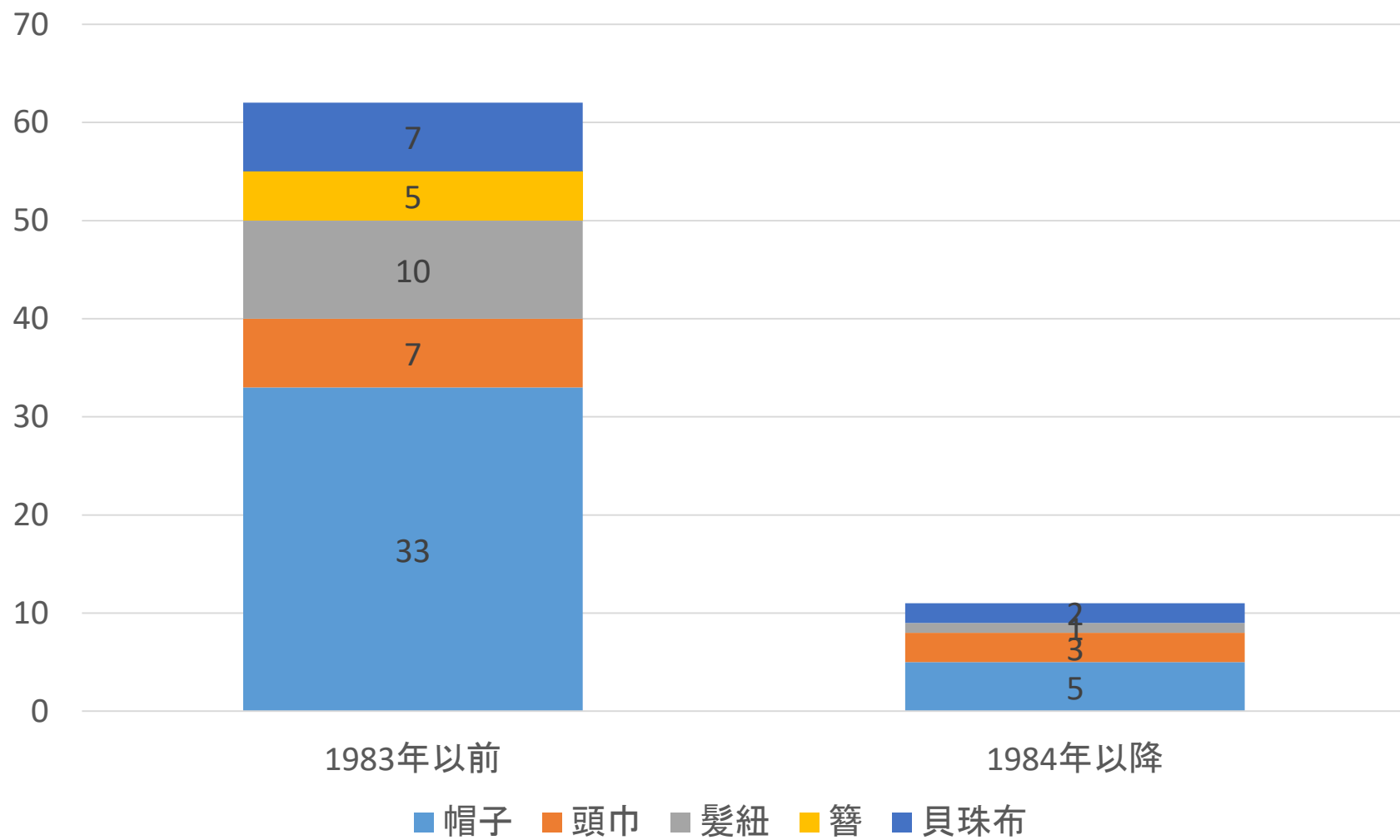


博物館所蔵の頭部装飾物



(典蔵台湾データベースより)

III 頭部裝飾物

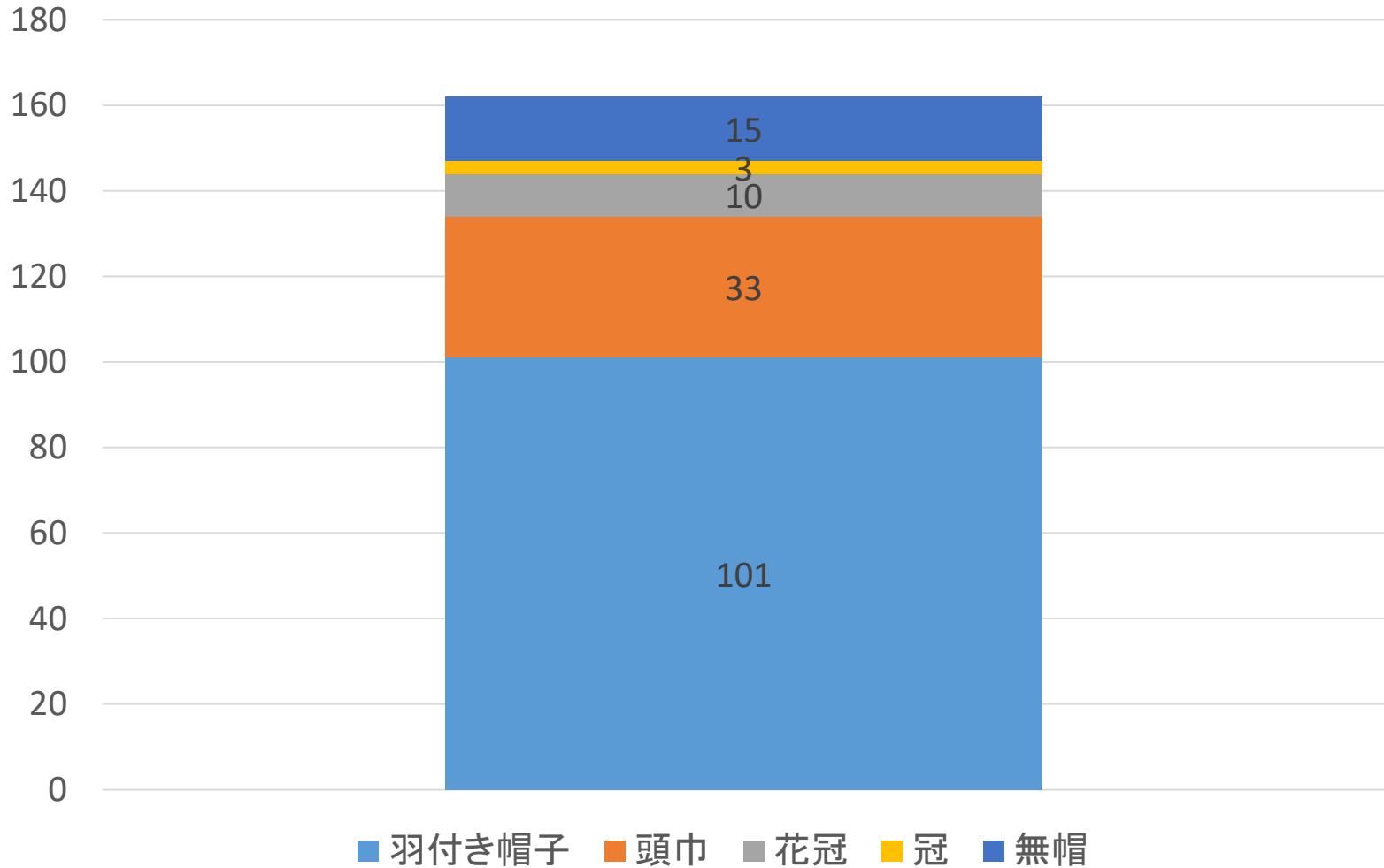


2000年以降の観光地の頭部装飾物



Japanese Class(<https://japaneseclass.jp/trends/about/タイヤル族>)より

2000年以降の頭部装飾物



【1983年以前】

形態→長衣が最多

文様→長衣、短衣

【1984年以降】

形態→長衣が最多

文様→横縞に次いで幾何学模様が増加。

【2000年以降】

形態→長衣は殆ど

文様→方衣は横縞

有袖短衣の

形態→有袖短衣の数が大幅に増加

無袖短衣・方衣は減少

文様→無袖長衣の幾何学模様が増加

有袖長衣の横縞が減り、縦縞が増加

形態→有袖長衣は激減

無袖服の消滅

文様→装飾物の消滅、長衣転用の可能性

方衣は横縞のみ残存

幾何学模様の変容

【博物館所蔵】

年代に関わらず帽子が最多。

【2000年以降】

羽付き帽子を着用している人が最多。漢民族風の金属製の冠を着用する人も...

考察

- ・ 博物館へ所蔵された衣服は横縞模様の長衣が最も多いが、先住民運動開始後から短衣、方衣共に幾何学模様の数が増えてくる
→自身の文化の再評価によるもの？
- ・ しかしその後、無袖や装飾物付き衣服の減少・消滅
→性差・職分けの意味付けなどについて無視
- ・ 1980年代以降、台湾の経済発展、内需拡大、週休二日制導入に伴い、観光が庶民のレジャー活動を占めるようになった(林,2009)
→先住民族文化が観光資源として「再開発」。
外部からの眼差しと、先住民自身の向上心がマッチ？
- ・ 2000年代の観光地の発展

結論

- ・台湾原住民運動

→直接的ではないにしても衣服の形態変化に関係

- ・観光資源化に伴い性差・職分けの意味合いはなくなり幾何学模様のみ残る(変容)

- ・漢民族とのかかわりの中での形態変化の可能性

参考資料

- ・山路勝彦(2011)「台湾タイヤル族の100年:漂流する伝統、蛇行する近代、脱植民地化への道のり」風響社.
- ・山本春樹・黄智慧・パスヤ・ポイツォヌ・下村作次郎(2004)「台湾原住民族の現在」草風館.
- ・日本順益台湾原住民研究会(1998)「台湾原住民研究への招待」風響社.
- ・若林正文(1983)「台湾抗日運動史研究」研文出版.
- ・ひとものこころ(1993)「台湾原住民の服飾」天理大学附属天理参考館.
- ・石垣直(2011)「現代台湾を生きる原住民」風響社.
- ・若林正文(2001)「台湾 変容し躊躇するアイデンティティ」精興社.
- ・藤巻正己・江口信清編(2009)「グローバル化とアジアの観光—他者理解の旅へ」ナカニシヤ出版
- ・山路勝彦(2009)「蛇行する〈原住民工芸〉:台湾タイヤル族の敷布文化、脱植民地化とモダニティ」34(1):41-85,国立民族学博物館研究報告
- ・笠原政治(2004)「台湾の民主化と先住民族」5:31-48,文化人類学研究
- ・丸山勝(2006)「中台政治関係の変動と台湾の文化状況」(2):71-82,目白大学総合科学研究
- ・汪明輝(2006)「台湾原住民族運動の回顧と展望—加えてツォウ族の運動体験について—」(18):17-28,立命館地理学
- ・王泰升(2004)「日本植民地統治と台湾人の政治的抵抗文化」鈴木敬夫訳,21(1):223-278,札幌学院法学
- ・田本はる菜(2012)「「原住民工芸」の表象と制作をめぐる—考察:台湾原住民の織物復興を事例に」,『史学』81(3),91(445)-113(467),三田史学会
- ・佐々木孝子・星野敏・九鬼康彰・橋本禪(2011)「台湾における原住民による社区营造の課題」,『農村計画学会誌』30:369-374,京都大学大学院
- ・住田イサミ(1996-03)「ルカイ族の豊年祭り:カバラヤン部落の祭儀と衣生活」(1):33-50,東京家政大学
- ・(2005)「先住民族の10年News」(115):1-4,先住民族の10年市民連絡会
- ・翁徐得(2002)「台湾当代工芸概説」昭和女子大学光葉博物館『台湾の現代工芸』東京:昭和女子大学光葉博物館
- ・湾観光局(<http://www.taiwan.net.tw/m1.aspx?sNo=0001091&id=8561>)最終閲覧日2017/12/01
- ・内政部統計(<http://www.moi.gov.tw/stat/chart.aspx>)最終閲覧日2017/12/01
- ・国立民族博物館データベース(<http://htq.minpaku.ac.jp/menu/database.html>)最終閲覧日2017/12/20
- ・烏來泰雅民族博物館データベース(<http://atayaldig.ipb.ntpc.gov.tw/atayal/>)最終閲覧日2017/12/25
- ・典藏台湾(<http://digitalarchives.tw/>)最終閲覧日2017/12/18
- ・中村平「台湾先住民族(原住民族)の10年を振り返って—法制度化を中心に—」(<http://www.geocities.jp/husv83/SenjuminHoseidoka10years.htm>)最終閲覧日2018/01/10